



文・写真：堀内 正範（ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長）

生み養い育ててくれた母の労苦に子どもはどう報いればいいのだろう。

慈母手中線 遊子身上衣  
臨行密密縫 意恐遲遲歸  
誰言寸草心 報得三春暉



唐の孟郊の詩「游子吟」から「寸草之心」と「三春之暉」とそれを合わせた「寸草春暉」とが成語となって、1200年ものあいだ親しまれてきました。

「寸草之心」は子どものまだ成長途上の心のこと。「三春之暉」は孟春、仲春、季春の春三カ月の暖かい陽光のこと。母は一人前になって旅に出る子どもが着る衣服（游子身上の衣）を「立派になって早く帰っておくれ」という思いを込めてひと針ひと針と縫いあげます。そんな母の愛を暖かな「三春之暉」にたとえています。暖かさでこれに過ぎる衣はないでしょう。手中に糸を操っている母の恩にどうやって報いればいいのだろう。この「寸草春暉」の詩を口ずさみながら、中国の子どもたちは自らの出立のことを思うのです。



母への思いを伝えるのが「母の日（母親節）」。日本でも中国でも5月第2日曜日です。先行のアメリカに倣ってカーネーションの花にプレゼントを添えて贈ります。母さんへの思いはどここの国でも同じように広がっています。ただしオーストラリアでは秋ですから菊の花を用いますし、韓国では「父母の日」として5月8日におこなわれています。

みずからが父母の労苦を知るところには父母はすでにいなかった。その恩を思う「哀哀父母」（『詩経「小雅」』から）は古くから伝え継がれてきた成語です。ところがいま史上まれな長寿時代になって、高齢期をすごす父母が生きているうちに親の恩に報いることが可能になっています。そこで「哀哀父母」をふまえて「愛愛父母」（『日経新聞「NIKKEIプラス1」』）という成語が生まれます。生きているうちに孝行をという明快さが「愛愛」にあります。「四字熟語」も時代とともに新たな味わいを付加しながら生きつづけていくようです。



# 堀内さんと愉しむ四字熟語 第17回

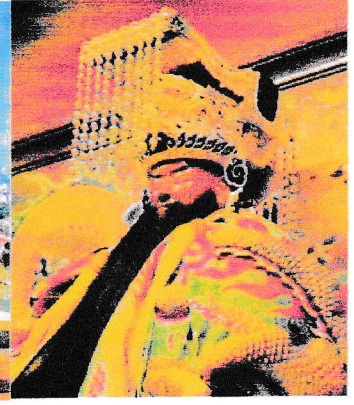
## 「単刀赴会」

たんとうふかい

文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

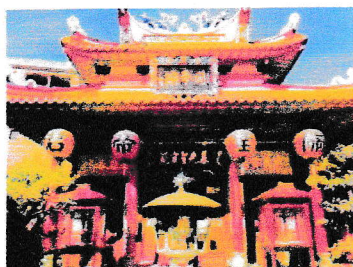
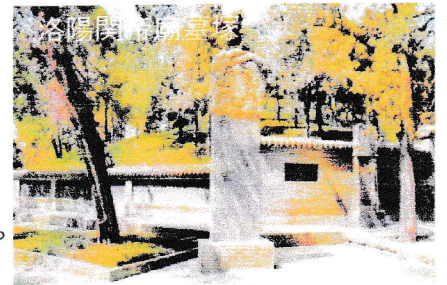


湖北省荊州市関羽公園の関羽像高さ5.8m



文聖孔子のふるさと山東省曲阜をたずねたことのある人は、孔林の奥にねむるその墓塚がさして大きくないことに気づかれたことでしょう。三年の喪に服した弟子たちが傍らから「老師・・・」と声をかければ、やさしく応じてくれそうな距離感にあります。

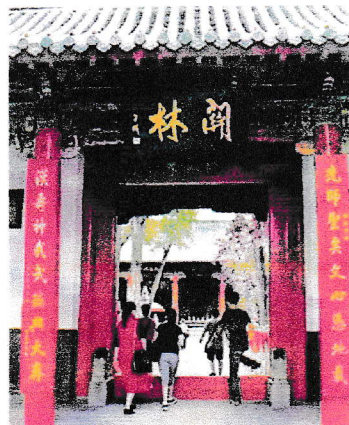
一方、武聖関公の首塚は、中原の古都洛陽の郊外に設けられています。荊州で呉軍によって討たれたあと、関羽の首級は洛陽にいた曹操のもとに送られ、王侯の礼をもって葬られたといいます。広い関林の奥に蜀将関羽は敵地の魏でねむっているのです。四囲壁によって守られている墓塚は、文聖孔子のそれに似て関公の存在が感じられるほどの大きさです。



洛陽・関林→  
蜀の武人が  
身をやつして  
お参りにきました

←神戸・関帝廟

どこの中華街にも「孔子廟」とともに「関帝廟」が祀られていて人びとの尊崇を受けています



そののち孔子廟が孔姓の住民に護られてきたのに対して、関帝廟は歴代王朝の官人と商人によって護られてきました。洛陽の廟域の周辺は大規模な関林市場になっています。おそらく当初は商人に身をやつした蜀の武人の姿もみられたことでしょう。

英傑関羽の豪胆さを伝える四字熟語に「言笑自若」（『三国志「蜀書・関羽伝」』から）があります。あるとき刺さった毒矢の毒を除くため、関羽は名医華佗の手術に左腕をまかせます。血がしたたり盆に溢れる間、関羽は肉をほおばり、酒を飲み、談笑しつづけたといいます。

もうひとつ「単刀赴会」（『三国演义「六六回」』から）は、単身で相手の陣営へ交渉に赴くこと。「関」の字の紅旗をかけた一艘の船で乗りこんで、腰刀一口を帯びた少数の供に護らせて魯肅との「蜀・呉交渉」に臨んだ関羽の姿を「単刀赴会」と称えています。関羽は魯肅との会合に「単刀」で乗り込み交渉を成功させます。

このひとり赴く「単刀赴会」と激痛に耐える「言笑自若」の関羽を思えば、少々ピンチにあわてることもないでしょう。データや資料をかかえて交渉に赴くとき、難関の試験に立ち向かうとき、このことばが支えてくれるに違いありません。

